最初の薬学博士

薬学雑誌 1899 年　380 頁，516 頁

「末は博士か大臣か」という句は今すっかり聞かないが，読者の中には子供のころ(お世辞か冗談か)言われた人はいるだろう．しかし，この句が始めて使われた明治の頃，博士は，後世とは比べ物にならないくらい重かった．では，薬学博士の第 1 号はいつか？ 明治 32 年薬誌 4 月号の叙任・辞令欄にあった．

帝国大学評議会ニ於テ学位ヲ授クヘキ学力アリト認メタル者

薬学博士		正六位勲六等　佐賀県士族	田原良純

帝国大学総長ノ推薦ニ依ル者

薬学博士	帝国大学医科大学教授正五位理学博士	長井長義
薬学博士	帝国大学医科大学教授正五位勲六等	下山順一郎
薬学博士	帝国大学医科大学教授正五位勲六等	丹波敬三

三月二十七日文部省　三月二十八日官報

実は明治 20 年の学位令交付以来，医科大学薬学科 3 教授にも医学博士号授与の通達があった．しかし医薬分業が難航し，大学内においても生徒数少なく(入学者ゼロの年もあった)薬学科の独立に危機感をもっていた当時「ここで個人の名誉だけのために医学博士号を受け先例を残したら薬学の独立は永久に葬られるであろう．薬学博士でなくてはだめだ」(根本曾代子・丹波敬三伝)と抵抗．しかし大学条例は変わらず，申し合わせて辞退したいきさつがある．

さて薬誌翌月の東京通信には初の薬学博士を祝う会の模様あり．乾杯のタイミングがちょっと今と違うので紹介する．

「4 月 22 日，帝国ホテルにて一般参加者は 3 時より続々入場，4 時頃 4 博士来席せられたるを以って一同記念撮影，余興は円遊の落語二席あり．華やかな楽隊の音にて食堂に案内され，食事終わりて，シャンパン酒を酌み，資生堂福原氏の首唱にて天皇皇后万歳三唱，衆員これに和し，この間楽隊は君が代を奏した．また博士万歳も三唱，祝辞，答礼，休憩室での談話，散会せしは午後 9 時過ぎなり」

小林　力